

## フォスター歌曲の未来

ディーン・L・ルート／佐藤 渉（訳）

アメリカ音楽と西洋音楽の日本への伝来、とりわけペリー艦隊の船上で船員たちが行った演奏を丹念に検証されたハウ博士に感謝申し上げます。ハウ博士は、日本にアメリカ音楽がもたらされたのは1853年と1854年に軍楽隊を乗せた黒船が到来した時のことであつたと指摘されました。また、船員たちが当時もっとも有名だった minstrel 劇団、クリスティーズ・ミンストレルズのスタイルを真似て「ミンストレル・ショウ」を演じたことにも触れられました。クリスティーズ・ミンストレルズには、1847年から1848年にかけてピッツバーグを巡業旅行した演奏家たちが加わっていました。彼らが未刊行の曲を含むフォスターの歌曲を初めて知ったのはこの時でした。クリスティーズ・ミンストレルズは、フォスターの曲を公の場で初めて演奏したグループの一つで、ニューヨークでの公演や英国公演旅行を通じて彼の曲を世間に広めました。クリスティーズのショウは、フォスター歌曲を他のどの作曲家の曲よりも多く取り上げました。

ルーサー・ホワイトニング・メイソンは、アメリカで出版した教科書でも日本で出版した教科書でもフォスターの歌曲は取り上げませんでした。一方で、彼はスコットランドのフォークソングは採録しました。生徒に教訓を与えるために新しい歌詞をつけて。時にフォスターの曲は、構成とハーモニーがスコットランドのフォークソングとよく似ています。実際、フォスターの歌曲は、メイソンがスコットランドのフォークソングをアレンジしたのと同じような方法で、アメリカの学校や教会で使われました。フォスターは讃美歌もたくさん書きましたが、アメリカでは人気がありませんでした。彼の讃美歌は日本でも使われなかっただろうと思います。

唱歌に登場した最初期のフォスター歌曲を検証された宮下教授にも感謝申し上げます。フォスターの「故郷の人びと」“Old Folks at Home” (Way down upon the Swanee River) は1888年、「あわれの少女」として新しい歌詞と共に初めて唱歌に収録されたこと、その後も日本の作詞家によって何度か新しい歌詞が施されて唱歌に取り上げられたことを教えて下さいました。また、宮下教授はいくつかのフォスター歌曲と、唱歌あるいは讃美歌としてそれらの曲につけられた日本語の曲名を挙げて下さいました。さらに、1949年から1986年の間に日本で出版された音楽教科書の30%にフォスターの曲が収録されていることを明らかにした杉本皆子氏の研究を紹介されました。これは驚くべきことです。そこでさらなる研究に向けて、次のように問うてみたいと思います。杉本が記録した曲以外にフォスター歌曲が使用されたことはあったのでしょうか。もしあったとすれば、日本の生徒、音楽家、あるいは一般向けに出版されたあらゆるジャンルの出版物において、それらの曲が初めて登場したのはいつなのでしょう。フォスター歌曲を収録した刊行物を網羅した目録を作成することは可能でしょうか。どのような社会運動や政治運動が一たとえば戦後の「生き生きと」という態度—その大義とのかかわりで、フォスター

歌曲に有用性を見出したのでしょうか。

1880年代から90年代の大阪は、日本における産業の中心地でした。ちょうどアメリカにおけるピッツバーグ（フォスターの故郷）がそうであったように。ピッツバーグ同様、大阪も人であふれかえるようになりました。そして「産業の中心である大阪がますます騒々しくなるにつれ、住人たちはなにわの静けさをいっそう懐かしんだことだろう。」<sup>1)</sup> なにわとは大阪がもっと静かだった時代の古称です。静穏を取り戻す上で、フォスターの曲にはアメリカの他のミンストレルやポピュラーソングに勝る二つの利点がありました。第一に、フォスターの歌詞と旋律の多くが田園の情景、すなわち自然の美を反映していました。フォスターの曲は日本の都市生活者の心に訴えるものがあつたのではないのでしょうか。ちょうど1850年代のアメリカで、都市に暮らす家族が静かな居間でフォスターの曲を演奏し、都市の喧騒を遠ざけようとしたようにです。第二に、フォスターの旋律と歌詞はとてもよく書けていたため、無学な演奏家や聴衆だけではなく、高度な教育を受けた人たちの心にも訴えたという点です。スウェーデンのソプラノ歌手ジェニー・リンドは、フォスターの生きた時代にもっとも広く知られていたオペラ歌手ですが、彼女は西ヨーロッパとアメリカのリサイタルでフォスターの曲を歌いました。ほかにも多くの訓練を積んだオペラ歌手、ピアニスト、オーケストラ指揮者、ヴァイオリニスト、その他コンサートの名手たちが1850年代にフォスターの曲を演奏し、今日でも演奏しています。

明治維新の後、「日本の音楽は西洋音楽に劣らず洗練されていて価値があることを証明」<sup>2)</sup> したがっていた日本の指導者たちは、ポピュラー音楽よりも西洋のクラシック音楽を好みました。フォスターの歌曲はクラシック歌手やヴァイオリニスト、あるいはそれ以外の演奏家たちのレパートリーの一部となっていましたので、日本の演奏家のレパートリーにも加わることになりました。私の講演の中で皆さんに聞いていただいた藤原義江によるオペラ調の録音がそれを裏付けています。日本で録音されたフォスター歌曲のレコードは、少なくとも1930年代まで遡ることができます。

1923年の大地震後、日本人はラジオ、電子録音、発声映画を通じて音楽を体験するようになりました。フォスター歌曲はアメリカから輸入されたラジオ番組の中で流れていました。宮下教授のご報告で驚いたのは、1926年から1930年にかけて日本のラジオで流れた曲のうち、頻度ではフォスターが23位に入っているという情報です。それをうかがって考えたのは、日本のラジオ、テレビ、映画、電子機器がいつ、どのようにフォスター歌曲を使用したのか、そして誰の演奏によるものだったのか記録することは可能だろうか、ということです。日本でダンス・バンドの数が大幅に増え、その中にはフォスターの曲を編曲して演奏したバンドがあることも私たちは知っています。アメリカの録音盤は日本でよく売れました。日本人演奏家による録音盤の売上が初めて海外盤を抜いたのは1967年のことでした。<sup>3)</sup>

したがって、日本で現代電子工学が発達する頃には、すでにフォスターの音楽は日本のエリート文化、大衆文化、民俗文化の一部として受容されていました。フォスター音楽をテレビや映画、アニメなどに採り入れるのは自然な流れでした。すでに親しまれていたフォスターの曲は、翻案して新しい用途に供するにはうってつけだったからです。

宮下教授は、太平洋戦争の間、フォスターの音楽を公に演奏することは禁止されていたと述べられました。たしかにその通りです。しかし、フォスターの曲を歌い続けた日本人もいました。

私は太平洋戦争に従軍した日本人と話したことがあります。彼らは戦地でフォスターの曲を口ずさんだり共に歌ったものだと語っていました。

私たちが日本におけるスティーブン・フォスター歌曲の遺産を研究し、よりよい理解を目指すにあたって、媒体の変化に合わせて、彼の曲が常に変容していくことを忘れてはなりません。宮下教授が唱歌集におけるフォスター歌曲の使用を検証されたように、着信音や音楽ダウンロードといった形で携帯機器上で使用されているフォスターの曲を記録することは可能でしょうか。フォスターは、オリジナルの録音からサンプリングした着信音である「着うた」や、一曲丸ごとダウンロードする「着うたフル」の一部となっているのでしょうか。<sup>4)</sup>

本シンポジウムの枠組みを作り、私たちが一同に会する機会を与えてくださったウェルズ恵子教授に再度お礼申し上げます。また、私たちに検討材料を与えてくださり、日本におけるスティーブン・フォスターの遺産を理解するのに役立つであろう新しい研究を提唱してくださったハウ博士と宮下教授にもあらためて感謝申し上げます。

## 注

- 1) Jeffrey E. Hanes, "Aural Osaka: Listening to the Modern City," p. 47, in Hugh de Ferranti and Alison Tokita, eds., *Music, Modernity and Locality in Prewar Japan: Osaka and Beyond* (Farnham, England: Ashgate, 2013), pp.27-50.
- 2) Gerald Groemer, "Popular music before the Meiji period," p. 278, in *The Ashgate Research Companion to Japanese Music*, ed. Alison McQueen Tokita and David W. Hughes (Aldershot, England: Ashgate, 2008), pp.261-79.
- 3) Christine Yano and Hosokawa Shuhei, "Popular music in modern Japan," p.355, in *The Ashgate Research Companion to Japanese Music*, ed. Alison McQueen Tokita and David W. Hughes (Aldershot, England: Ashgate, 2008), 345-62.
- 4) See Noriko Manabe, "Ring My Bell: Cell Phones and the Japanese Music Market," pp.257-67, in E. Michael Richards and Kazuko Tanosaki, eds., *Music of Japan Today* (Newcastle, UK: Cambridge Scholars Publishing, 2008).

